



名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯

— 映画『約束』の紹介 —

足利事件、布川事件、東電OL殺人事件と相次ぎ冤罪が明らかになるなかで、52年間、冤罪を訴え続ける死刑囚がいることをご存知でしょうか。無実の死刑囚・奥西勝さんがその人です。いま、この奥西勝さんの半世紀以上にわたる独房での闘いを描いた映画『約束』（東海テレビ製作）が、2月16日から東京ユーロスペースで封切られ、マスコミでも大きな話題となっています。

事件は、1961（昭和36）年、三重県名張市の山深い里で起こりました。村の公民館での懇親会の席上、ぶどう酒に農薬・ニッカリンTを入れて5人を殺したというものです。一審判決は、証拠を詳細に検討して、無罪判決を言い渡しました。ところが二審判決は一転して死刑。根拠とされたのは、著名な学者がおこなった捏造鑑定でした。捏造がわかったのは、死刑が確定した

後のことです。戦後唯一、無罪からの逆転死刑判決です。

奥西さんは、今年1月で87歳となりました。昨年5月に名古屋高裁で再審開始決定が取り消された直後、奥西さんは病気が悪化して、名古屋拘置所から八王子の医療刑務所に移され、病気と死刑執行の恐怖と闘いながら、いまでも獄中から再審開始、無罪を求め続けています。

この映画・『約束—名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の生涯』（監督・齊藤潤一）は、事件発生直後から取材を続けている東海テレビの製作です。映画は、事件の事実関係については膨大な裁判記録と関係者への独自取材と証言等によるドキュメンタリー、映像として撮れない奥西さんの獄中の闘いは、日本を代表する俳優・仲代達矢さん樹木希林さん等が演じるドラマとして構成されていますが、これが見事に合体した臨場感

あふれる作品となっています。死刑執行の恐怖にさらされるもとで、獄中から無実を訴え続ける奥西さん、殺人犯の母と見られながらも息子を信じ続ける母・タツノさん、冤罪を晴らすために奮闘する弁護士・支援者。映画では、それらの人たちの姿を通して、冤罪犠牲者・家族の苦悩、無実の人を救おうと立ち上がる人たちの良心、そして警察、検察、裁判の問題点が映し出されます。

奥西さん役に仲代達也さん、タツノさん役に樹木希林さん、ナレーターは寺島しのぶさん。役を引き受けるにあたり、仲代さんは事件の記録を読み込み、樹木さんは事件現場に足を運びました。インタビューに応え、仲代さんは、「僕がこの映画に出るということは、僕が街頭に立って、『奥西さんは無実だ』と叫ぶのと同じ」と思いを語っています。

この事件を早くから取材し、『名張毒ブドウ酒殺人事件—六人目の犠牲者』（岩波現代文庫）の著書もある江川紹子さんは、この映画について以下のコメントを寄せています。

「必ずや生き抜いて濡れ衣を晴らしてやる—奥西勝さんの強い信念が、仲代達矢さんの肉体を通じて、ぐいぐい迫ってきます。息子の無実を信じ、帰ってくる日を待ちながら手紙を書き続ける母タツノさん。樹木希林さんの姿を借

りて蘇る。切々たる母の思いに、涙がこぼれます。裁判所や検察は、奥西さんの獄中死を待っているのかもしれませんが、そんな不正義は絶対に許せない。映画を見て、この思いを新たにしています。」

映画は、好評を得て連日多くの人が観賞し、「何か私にできることはありませんか」との問い合わせが、この事件を長年支援している国民救援会に寄せられています。

ジャーナリズムと映画人から冤罪を生む出す日本の刑事司法への異議申立である、この映画『約束』を一人でも多くの方に見てもらいたいし、さらにまわりの友人知人にも広めていただければと思います。

東京・渋谷ユーロスペースでの上映は3月15日までの予定です。その後、全国各地で上映されます。詳しくは、『約束』の公式ホームページ <http://yakusoku-nabari.jp/> を。

（瑞慶覧淳 ずけらん・あつし／
日本国民救援会中央本部副会長）



『約束
名張毒ブドウ酒事件
死刑囚の生涯』

脚本・監督：齊藤潤一
2012年/日本/120分
製作・配給：東海テレビ放送

家庭と社会へのメッセージ

『パパ、ママをぶたないで』～アムネスティ映画祭より～

今年も、アムネスティ・インターナショナル日本が主催する映画祭「アムネスティ・フィルム・フェスティバル」(2013年1月26日・27日/於・ヤクルトホール)に足を運んだ。隔年開催されるこの映画祭では、「異なる文化や背景を持つ制作者が、さまざまな思いで作上げたフィクションやドキュメンタリーを通して、世界で何が起きているのか、人間の尊厳とは何か、を皆さまと一緒に考えていくことを目指してい」る。

映画祭で私が鑑賞した2本のうち、今回はノルウェーの家庭内暴力をテーマにした『パパ、ママをぶたないで』を紹介したいと思う。

◇あらすじ◇

ボーイ少年の父親は、彼の母親に怒鳴り、暴力を振るう。いつも父親の機嫌をうかがい、怪獣のような父親に傷つけられる母親を見て、少年は自分にその原因があるのではないかと思悩む。「パパ、ママをぶたないで」という言葉を心で叫び続けるが、父親への恐怖で息もできず、家の外に飛び出してしまう。隣人のおばさんは、元気のないボーイを気にかけて話しかけるが、彼は何も答えられない。そんな時、小鳥や犬など、家の周りに集まる動物たちの励ましの声に勇気づけら

れ、ボーイ少年は自分の悩みを手紙で王様に打ち明ける。すると事態はよい方向に進みだす…。

◇被害者・加害者 双方のケアを◇

切り絵？ 影絵？ とも思わせる特徴的なイラストが巧みなアニメーション技法によって操られ、愛らしい子どもの声優の声とともに印象的な場面を作り出す。かわいらしいアニメーションだが、ある子どもの実体験をもとに制作された作品ということで、父親が正気を失い母親を襲うシーンや、恐ろしさに身体を強張らせる子どもの息づかいなど、鬼気迫る。

この映画が作られたノルウェーでは「暴力ではないもうひとつの道(ATV=Alternative to Violence)」という民間団体が家庭内暴力根絶のため活動しており、加害者更生プログラムや被害者支援を行っているという。日本では、Domestic Violenceの頭文字をとってDV=家庭内暴力と呼ぶが、ノルウェーでは、これが既婚夫婦、事実婚にあたる相手、恋人、別居中の配偶者、離婚した配偶者などに起こる暴力を意味することから「親しい間柄の暴力」(Vold i nære relasjoner =Violence in close relationship) という表現で統一しているようだ。

この映画を観て、「親しい間柄の暴力」の被害は暴力を直接受ける者だけでなく、子どもなど家族のところに及ぶことの悲劇を知った。また、まず傷ついた当事者が誰かに事実を伝えること、そして加害者が更生すること双方に、社会が

チャンスを与える体制を用意しておくことの重要性を教えられた。(望)

『パパ、ママをぶたないで』

監督：アニータ・キリ／2009年

ノルウェー／20分／配給：パンドラ

<http://pandorafilms.wordpress.com/dvd/papa/>

〈2012年12月号・プレゼント企画のご報告〉

昨年末、日頃のご支援の感謝の気持ちを込めて、会員のみなさまへのプレゼントのお知らせをお届けし、「HuRP賞」と「金大中賞」への応募を募集いたしました。

その後、「金大中賞」にご応募いただいた中から、見事会員のOさんが当選されました。そのご報告をかねて、Oさんからお寄せいただいたHuRP通信への感想を掲載させていただきます。

Oさん、おめでとうございます！ ご応募とご意見をありがとうございました。そして、みなさま今後ともHuRPの活動に引き続き参加やご支援をお願いいたします。

[Oさんからのご意見・ご感想]

毎号楽しみに拝読をさせて頂いております。特に新連載の「3.11とわたし」は注目しています。3.11という出来事に対して、皆が色々な感慨なり意見をもっていると思いますが、日々の生活で接する情報なり報道は、どうしても限られてくるので、通信を通じてどんな人がどんなことを考えているのか、世界の広がりを感じたいと思います。

草の根という言葉がありていますが、現場レベルで市民が何を考えるのか、をハーブを通じて知る日々です。

また映画や本のレビューも楽しみですが、料理に関するコラムなどもまた掲載して頂ければと思います。



・金大中賞



・直接お渡しできました

【編集後記】▶今月は映画がメインとなる誌面になりました。米アカデミー賞とは関係ありませんが…映画の中でも、事実をもとにつくられた作品やドキュメンタリーは、社会問題や現実世界に起こるさまざまなことがらに目を向けるきっかけを与えてくれます。通信で紹介する映画をみなさんも鑑賞してみてください。▷2月21日、3人の死刑囚に刑が執行された。カットは絞首刑に使われる縄と‘いのちの灯火’。しばしば死刑執行方法の残虐性などが問われるが、残虐でなければ国が人の命を奪っていいのか。取り調べの可視化、えん罪の問題とともに、今後も死刑制度について注視したい。*3月号は、東日本大震災から2年―「3.11」特集です。(望)

